ペーターのリーダーアーベント

6月26日付けでイヴェントの人数制限が撤廃され、コロナ禍終息に希望が見られるようになった。しかし「音楽界はすでに夏休み目前でその恩恵にはあずかれない」と嘆くチューリヒ歌劇場で、6月28日、マウロ・ペーターのリーダーアーベントを聴いた（ピアノはアン・カトリン・シュトッカー）。

スイス人テノールとして国内外での活躍が頼もしいペーターは、いつものように満面の笑みを浮かべて登場し、シューベルトを柔軟な声で歌い始めた。《ガニュメート》、《漁師》、《トゥーレの王》のドラマ性がいい。外は雷も降り始め、繊細な表現を邪魔するほどの雑音が聴こえるが、息のコントロールも上品に《月に寄せて》を歌い終わり、退場。《最初の喪失》そして《耽溺》には難があった。《去って行った人に》での高音の出だしが上手いが、ゆったり取ったテンポは止まりそうで、もっと流れがほしい。やはり、ルツェルン音楽祭デビュー時のヘルムート・ドイチュのようなピアニストが必要か。速いテンポの《歓迎と別れ》を歌い終わるとブラヴォーがいくつも飛んだ。

R・シュトラウスの歌曲は、母音を変えすぎるため安定した歌唱にならない。しかし《睡蓮》、《夕暮れをゆく夢》、《セレナーデ》、そしてアンコールでの《朝》など、柔らかい声を駆使できる曲はすばらしい。ますますの研鑽を期待したい。

トーンハレ管が新装された本拠地に戻る

7月2日はチューリヒ・トーンハレ管弦楽団の4年間の仮住まいだったトーンハレ・マーグで最終コンサートが催された。毎年好評の無声映画に合わせた生演奏会で、今年は《ペン・ハー》。映画コンサートの顔となっているシュトローベルの指揮で、フル・オーケストラは休憩をはさんで140分以上、力いっぱい弾ききった。チューリヒ市長のコリン・マウホ氏も自転車で駆けつけ、このホールを8カ月で完成させたという建築家も招かれていた。オリジナルのトーンハレに音響を限りなく近づけた優秀な造りで、サイモン・ラトルは「このホールをトラックに積んで、ロンドンに持って帰りたい」と言ったそうだ。現在までに、コンサートホールとして続投する道は決まっていないため、数年後に取り壊される運命にあるが、インテンダントのシュミール女史は「絶対移転先を探す」と、スピーチで勢いを見せた。

新装オープン前のトーンハレにて。来シーズンの記者会見が始まる前に筆者が撮影

7月5日は新装された湖畔のトーンハレで、次シーズン・プログラムの記者会見が行われた。まずはバルコニー席に座らされると、暗闇のなかにライトアップされた新しいオルガンが鳴り響いた。古いオルガンも評判が良かったが、サイドにスペースを設けられた新しいオルガンの音は、暴力的にならずに天井まで満たし、天井画に描かれている楽聖たちも満足げに見える。パイプが共鳴で微かに揺れ、ライトを反射した光がミラーボール効果を起こすという計算外の演出も加わり、印象的なメンデルスゾーンだった。

前日ミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団を振った音楽監督のパーヴォ・ヤルヴィも駆けつけ、この美しい内装と湖の眺めが戻ってきたこと、そして、想像以上に良くなった「夢のような」音響と、雑音を吸収してくれるメカニズムを嬉々として説明した。次シーズンも休憩なしのプログラミングだが、毎回終演後にフォワイエでアーティストを囲む機会が提供されるのは楽しみだ。1895年にブラームスが指揮したマーラー「交響曲第3番」で柿落としされたこのホールは、新装後も同曲で9月15日に新シーズンがスタートする。ブリテン《戦争レクイエム》を任されるケント・ナガノや、内田光子、ユリア・フィッシャー等からも、新トーンハレの音響に期待のメッセージが届いている。

チューリヒとバーゼル 新装コンサートホール比較

それよりも古いバーゼルのカジノホールも昨年拡張工事が完成して初シーズンだったが、コロナ禍のイヴェント中止に遭い未体験だった。今シーズンが終わってしまう前に、4月から延期されていたジャズ・フェスティバルの『アストル・ピアソラ生誕100周年記念コンサート』へ7月9日、赴いた。

1876年に完成したシュテーリン・ムジークサールの外壁にフォワイエ部分を増築した。オペラハウスの緞帳色の階段は、まるで舞台装置のようで、昇りきるとゴージャスなシャンデリアの周りをソファが囲むようにできている最上階が、ため息ものの美しさ。クロークや化粧室もぜいたくなスペースで、音楽会への期待も高ぶる。しかしホール内部は以前と変わらず、オレンジ系の内装の赤みが増したか。

ピアソラの末裔人が結成にかかわり、グラミー賞も受賞しているピアソラ五重奏団は、欧州ツアー出発前日にアルゼンチン政府が国境を閉鎖するという噂を聞き、夜のうちに車で11時間かけてボリビアに脱出し、渡欧したという。ピアニストだけは間に合わなかったので、代役を立てていた。ていねいに弾いているのだが、ピアソラ自身の演奏で味わったあの感激にはもう出合えないと証明されたような喪失感を覚えた。ホール内部はチューリヒ、ホワイエほかはバーゼルに軍配が上がるので、双方訪れたい。